

『源氏物語』について

—— 呼称「姫君」を中心に ——

山 本 恵

序

一、「姫君」とその庇護について

— 45 — 『源氏物語』について

源氏物語には、光源氏をめぐって、実に多くの女性が登場する。そして、彼女達には、いろいろな呼称が用いられている。一人の女性の人生の中でも、呼称は様々に変化しており、大変興味深い。今回は、多くの女性呼称の中から、「姫君」を取り上げ、特に紫上に注目して論じてみたい。なお、引用文は、青表紙本の宮内庁書陵部本を底本とした岩波文庫本『源氏物語』である。そして『源氏物語大成』から、河内本や別本に異文がみられる場合は、その都度指摘していく。

「姫君」については、今までのところ、田中恭子氏^(注1)、長谷川茂樹氏^(注2)、平松美津子氏^(注3)、宮川葉子氏^(注4)が扱っている。

まず、田中氏は、「姫君」を「高貴な家に生まれ、親又は親に準ずる後見者の庇護下にあり侍女らに圍繞され養育されている、或はされた女性をさす美称」であると定義している。「親又は親に準ずる後見者の庇護」は、長谷川氏も^(注5)、「姫君」と呼称される女性の条件の一つに、「父親またはそれに代わる人物によって

かしづかれてゐる」として、挙げてゐる。

これらの論をふまえた上で、私は、庇護という点に着目し、明石姫君、末摘花、玉鬘、紫上といった、庇護の状況の異なる四人の女性を例に、再検討した。その結果、「姫君」は、父親又はそれに代わる人物の庇護下にあるか（明石姫君・紫上）又はかつて庇護下にあり、それ以後身辺の変動のみられない女性（末摘花）に用いられる呼称である。また、庇護下になくても、乳母をはじめとした身分の低い者の立場からみて尊重されている女性（玉鬘）を「姫君」と呼称する、という結論を得た。

紫上に関しては、平松氏の指摘のように、「彼女が『姫君』と呼ばれるのは源氏の庇護下に属した時であり、決して父親によるものではない」とみてよいだろう。

ところで、紫上が、光源氏の庇護下に属することになった時の状況であるが、若紫巻で、光源氏に略奪されるように二條院へ連れて来られ、突然、源氏の庇護下で、二條院の姫君という立場に置かれることになる。私は、このことが、紫上の「姫君」呼称の出現に、何らかの影響を及ぼしているのではないかと考えた。そこでその点に留意して、紫上の呼称をみていくことに

する。

例①中に、「十ばかりにやあらむ」と見えて、白き衣、山吹などの、なれたる着て、走りきたる女ご、あまた見えつる子どもに、似るべうもあらず、いみじく、生ひさき見えて、美しげなるかたちなり。（若紫 P 169）

②「おのづから、「さるやうありて、きこゆるならむ」と、思ひなし給へかし」と、のたまへば、いりて、きこゆ。

「あな、いまめかし。」「この君や、世づいたる程におはする」と、おぼすらむ。さるにては、かの「若草」を、いかで聞き給へることぞ」

と、さま／＼あやしきに、心も乱れて…（若紫 P 178）

③このわか君、をさな心地に、「めでたき人かな」と、見給ひて、

「宮の御有様よりも、勝り給へるかな」と、のたまふ。（若紫 P 185）

④このわか草の生ひ出でん程の、なほゆかしきを、「似げない程」と、おもへるしも、ことわりぞかし。いひより難き事にもあるかな。いかに構へて、たゞ、心やすく迎へとりて、明け暮れ

の慰めに見む。兵部卿の宮は、いとあてに、なまめい給へれど、匂ひやかになどもあらぬを、いかで、かの一族におぼえ給ふらん。ひとつきさき腹なればにや」など、おぼす。ゆかり、いと睦ましきに、「いかでか」と、ふかうおぼゆ。

(若紫 P 188)

⑤君(ひめきみー河内本)は、うへを恋ひ聞え給ひて、泣き臥し給へるに、御遊びがたきどもの、「直衣着たる人のおはするは。宮のおはしますなめり」と、きこゆれば、おき出て給ひて、「少納言よ。直衣着たりつらんは、いづら。宮のおはするか」とて、よりおはしたる御声、いと、らうたし。

(若紫 P 200)

⑥「いかで、かう人少なに、心ぼそうて過ぐし給ふらむ」

と、うち泣い給ひて、いと、見捨てがたき程なれば、

「御格子まゐりね。物恐ろしき、夜のさまなめるを。宿直人にて侍らん。人々、ちかう侍はれよかし」

とて、いと馴れ顔に、御帳の内に、入り給へば、

…中略…わか君は、いと恐ろしう、「いかならん」と、わな、かれて、いと美しき御肌つきも、そろ寒げに思したるを、らうたくおぼえて、単衣ばかりを、おしく、みて、わが御心地も、かつは、うたて思え給へど、あはれにうち語らひ給ひて…(若紫 P 203)

⑦かしこには、今日しも、宮、わたり給へり。年頃よりも、こよなう荒れまさり、廣う物ふりたる所の、いと人少なに、さびしければ、みわたり給ひて、「かゝる所には、いかでか、しばしも、幼き人の過ぐし給はん。猶、かしこに渡したてまつりてん。なにの、所せきほどにもあらず。乳母は、曹司などして、さぶらひなむ。君は、わかき人々などあれば、もろともに遊びて、いとう物し給ひなむ」

など、のたまふ。(若紫 P 205)

⑧わが御方にて、御直衣などはたてまつる。惟光ばかりを、馬に乗せて、おはしぬ。門、うち敲かせ給へば、心も知らぬものの、あけたるに、御車をやら引き入れさせて、たいふ、妻戸を鳴らして、しはおけば、少納言、聞き知りて、出で来たり。

「こ、におはします」

と、言へば、

「幼き人は、御殿籠りてなむ。などかいと夜深うは、出でさせ給へる」

と、「ものの便り」と思ひていふ。

「宮へ、わたらせ給ふべかなるを、その先に、きこえ置かむ」とてなむ」と、のたまへば、

「何事にか侍らん。いかに、はかしくしき御いらへ、聞えさせ給はん」

とて、うち笑ひて居たり。君、入り給へば、いとかたはらいたく、

「うち解けて、あやしきふる人どもの、侍るに」と、きこえさす。

「まだ、おどろい給はじな。いで、御目、さまし聞えむ。かゝる朝霧を知らでは、寝る物か」

とて、入り給へば、「や」とも、え聞えず。君は、何心もなく寝給ひつるを、いだし驚かし給ふに、おどろきて、「宮の、御迎へにおはしたる」と、寝おびれて思したる御髪、かきつくろひなどし給ひて…(若紫 P 211)

⑨「いざ給へ。宮の御使にて参り来つるぞ」と、のたまふに、「あらざりけり」と、あきれて、「恐

ろし」と、思ひたれば…中略…わか君も、「あやし」と思ひて、泣い給ふ。(若紫 P 212)

ここまでのところは、光源氏の庇護下に置かれる以前の呼称である。河内本の一例を除き、「姫君」という呼称はみられない。河内本の「姫君」についても、青表紙本・別本では「君」としか書かれていないこと、その後の例からは、河内本の中でも、「姫君」という呼称がみられないことから、例外的と考えてよいだろう。

さて、その後、二條院へ向い、西の対で源氏の庇護下に置かれてからの呼称であるが、

⑩二條の院は近ければ、まだ、明うならぬ程におはして、西の対に、御車寄せて下り給ふ。わか君をば、いとかららかにかき抱きて、おろし給ふ。(若紫 P 212)

⑪こなたは、住み給はぬ対なれば、御帳などもなかりけり。惟光召して、御帳・御屏風など、あたり／＼、したてさせ給ふ。御几帳の帷子ひきおろし、御座など、たゞ、引きつくろふばかりにてあれば、ひんがしの対に、御宿直物召しに、つかはして、大殿籠りぬ。わか君は、いとむくつけう、「いかにする事ならん」と、ふるはれ

給へど、さすがに、声立てても、え泣き給はず。

(若紫 P 213)

⑫日高う寝起き給ひて、

「人なくて、悪しかめるを、さるべき人々、夕づけてこそは、迎へさせ給はめ」

と、のたまひて、対に、童へ召しに、つかはず。

「小さきかぎり、殊更にまゐれ」と、ありければ、いと、をかしげにて、四人参りたり。君は、御衣にまとはれて臥し給へるを、せめて起して、「かう、心憂くなおはせそ。すゝろなる人は、かうはありなむや。女は、心やはらかなるなむよき」

など、今より教え聞え給ふ。(若紫 P 214)

⑬やうく、人まゐりあつまりぬ。御遊びがたきの童べ、児ども、いと、めづらかに、今めかしき御有様なれば、おもふことなく、あそびあへり。君はをとこ君のおはせずなどして、さうくしき夕暮などばかりぞ、尼君を恋ひ聞え給ひて、うち泣きなどし給へど、宮をば、殊に思ひ出で聞え給はず。(若紫 P 217)

依然として「君」「わか君」といった呼称が続いている。そして、「姫君」という呼称が、青表紙本、河内本、

別本のすべてにみられるようになるのは、

⑭わが御かげの、鏡台にうつれるが、いと清らなるを見給ひて、手づから、この紅花を書きつけ、にははして見給ふに、かくよき顔だに、さて、まじれらむは、見苦しかるべかりけり。ひめ君、見て、いみじく笑ひ給ふ。(末摘花 P 254)

この、末摘花巻の例が初めてなのである。

紫上が、全く予期せず、突然、二條院へ連れて来られたことは、このように、「姫君」呼称の出現の遅れ、という形で、影響を及ぼしていると私は考える。身分の卑しい母のもとで育てられていた明石姫君でさえ、源氏のもとへ引きとられると同時に、「姫君」と呼称されるようになる。それは、明石姫君が、姫君として迎えられる準備をなされた上で、二條院へ引きとられたからであろう。紫上の場合、急であつたため、付き添つて二條院へ向かつたのは、乳母の少納言一人で、二條院へ着いてからも紫上を、姫君として迎える準備は全く整えられていない状態であつた。このことが、光源氏の庇護下にあることを示す「姫君」呼称の出現を遅らせることになったと考える。

二、結婚と「姫君」

長谷川氏^{（注）}は、「姫君」と呼称される条件に「結婚または出仕などをする以前の者」を挙げ、「結婚または出仕以後にもその呼称が見られるのは特殊な例である」としている。結婚によって「姫君」と呼称されなくなる女性と、呼称され続ける女性とがいるわけだが、長谷川氏が「特殊な例」とする後者について、田中氏は、「妻間の形をとる当時の結婚においては、結婚しても女性が親のもとにいたるために（婿の男君に対する女君として造型されているくだりを除けば）親の家の中でお姫様でいられる」からだと言っている。これについて私は、源氏をめぐる女性の例から再確認し、さらに光源氏のその女性に対する結婚後の意識にも留意して、結婚と「姫君」呼称についてみていった。

まず、結婚によって「姫君」と呼称されなくなる女性として、明石姫君や藤壺の場合、父親の庇護のもとで、かしづかれてきた邸を離れ、帝や東宮のもとへ妃となるべく入内するわけである。そして、このことは、彼女達が姫君としての立場に別れを告げ、宮中の人となることである。そこで「姫君」又は「姫宮」と呼称されなくなるのであろう。

また、夕霧の妻となる雲井雁であるが、彼女は、梅枝巻まではほとんど「姫君」と呼称されている。そし

て、夕霧と結婚する藤裏葉巻からは、「姫君」呼称はみられなくなり、かわりに、「北の方」「うへ」といった呼称が現れる。ところが、夕霧巻に、花散里と夕霧のこんな会話がみられるのである。

⑮ 「人の偽りにや」と、思ひ侍りつるを。まことに、さるやうある御気色にこそは。みな、世の常のことなれど、三條の姫君の思さんことこそ、いとほしけれ。のどやかにならひ給うて」と、きこえ給へば、

「らうたげにものたまはせなす「姫君」かな。いと、鬼しう侍るさがなものを」（夕霧 P. 262）

ここで花散里が「三條の姫君」と呼んでいるのが、雲井雁である。花散里が、「姫君」と「愛情をこめて上品に」雲井雁を呼称したのに対する夕霧の反応を、田中氏は「夕霧は、今や古女房の口やかまし屋を『ひめ君』だなんていえるものか、と駁す。」とし、さらに「姫君とは、若やかに美しく可愛らしい心ばえをもつ深窓にかしづかれるお嬢様風情の人という呼称だ、という認識があるものと考えられる。」と述べているように、やはり「姫君」と呼称されるためには、その女性の「姫君」と呼ばれるにふさわしい内面的な要素も必要とされるのだろう。雲井雁は、結婚後、しだい

に可憐さを失い、「姫君」というには似つかわしくない女性になっていく。

さて、一方、結婚後も「姫君」と呼称される女性として、まず、葵上は、桐壺巻で、光源氏の元服後、結婚し、正妻となる。しかし、その呼称をみると、正妻であれば当然用いられるはずの「北の方」「うへ」といった呼称が生前に全くみられず、また、一般的に「婚姻の間柄にある男女の女の方」^(注11)に用いられる「女君」という呼称も、若紫巻を最後にみられなくなってしまう。しかし、「姫君」は「大殿」という呼称とともにずっと用いられ続け、死後も「故ひめ君」という形で現われるのである。このことについて、宮川氏は「葵は『大殿』と呼ばれる回数が多く、左大臣家の奥深くに大勢の従者にかしずかれた中で、没個人^(注12)の体で住んでいた姿が浮かび上がって来るのだが、彼女は左大臣夫婦の想い出の中で『姫君』として生き続け、そのため死後も長い期間に渡って話題にのぼる、という他の女性性の物語には見られない特徴がある。」と述べている。同様に、長谷川氏は「周囲から左大臣家の姫君として見られている人物、という葵上の性格を強く示すものである」としている。両氏の言うように、やはり葵上は、結婚後も左大臣邸でお姫様として大切にかしづ

かれた女性として、強く意識して描かれており、そのために、「姫君」と呼称されるのだろう。さらに、

①⑥ たゞ、絵に書きたる、物の姫君（人ー河内本）のやうにし据ゑられて、うちみじろき給ふ事も、かたく、麗しうてものし給へば、思ふことも、うちかすめ、山道の物語をも聞えん、いふかひありて、をかしう、うちいらへ給はばこそ、あはれならめ、世には、心も解けず、うとく恥づかしきものに思して、年の重なるに添へて、御心の隔てもまさるを、いと苦しく…（若紫 P

187)

この例にみられるような、葵上の、お姫様然として打ち解けない有様が描かれている。葵上には、光源氏の妻として「女君」という呼称もみられるが、実際、源氏と葵上とは、愛情の通いあった夫婦ではなかった。結局、光源氏は、葵上のことを愛すべき「女君」としてよりも、左大臣家の「姫君」として強く意識し、「女君」呼称は途中で用いられなくなり、「姫君」呼称が残ることになったのであろう。

次に、末摘花であるが、彼女は、異文を含めれば、三例ほど「女君」と呼称されているのだが、その後「女君」呼称が続くことはなく、「姫君」だけが依然とし

てみられるのである。末摘花に対して、やはり、落ちぶれてはいるものの、常陸宮家の姫君としての意識が強かったのだらう。そして、光源氏が、自分にふさわしい「女君」として、末摘花をみてはいなかったというところが、呼称に表れているといえよう。

女三の宮は、光源氏のもとへ降嫁するまでは、父親の朱雀院によって庇護される女性として、「姫宮」という呼称が用いられるわけだが、実は、降嫁後も「姫宮」呼称が非常に多くみられるのである。このことについて、宮川氏は、女三の宮の「精神的な幼なさ」が要因であるとしているが、私は、女三の宮の降嫁の状況から「姫宮」呼称について考えてみたい。

女三の宮は、光源氏のもとへ降嫁する前は、朱雀院の庇護下で大切にかしづかれていた。光源氏のもとへ降嫁することになったのも、朱雀院にかわって女三の宮を庇護する人物として源氏が適役だと思われたからである。そのため、女三の宮の降嫁は、結婚というより、朱雀院から光源氏への庇護者の交代といった性格が強く感じられる。そして、光源氏も、こうした状況の中では、女三の宮に対して、正妻でありながら、「女宮」としてより、「姫宮」として強く意識したのであらう。

さて、紫上は、末摘花巻で「姫君」呼称が現れた後、

①⑦宮は、そのころ、まかで給ひぬれば、例の「ひまもや」と、うかゞひありき給ふをことにて、大殿には、さわがれ給ふ。いとゞ、かのわか草、たづねとり給ひてしを、「二條院には、人むかへ給へるなり」と、人の聞えければ、「いと、心づきなし」と、おほいたり。(紅葉賀 P. 262)

①⑧ひめ君(わかきみ・河内本)は、なほ、時く、思ひいで聞え給ふ時、尼君を恋ひきこえ給ふをり多かり。君のおはする程は、まぎらはし給ふを、夜などは、時くこそ、とまり給へ、こ、かしこの御暇なくて、暮るれば出で給ふを、したひ聞え給ふ折などあるを、いとらうたく、思ひ聞え給へり。(紅葉賀 P. 263)

①⑨をとこ君は、朝拝に参り給ふとて、さしのぞき給へり。

「今日よりは、おとなしくなり給へりや」

とて、うち笑み給へる、いとめでたう、愛敬づき給へり。いつしか、難おしすゑて、そゝきゐ給へる。…中略…いで給ふ気色、所せきを、人々、端に出でて見たてまつれば、ひめ君も、たち出

でて見たてまつり給ひて、雛の中の、源氏の君
つくろひたてて、内裏に参らせなどし給ふ。(紅
葉賀 P 266)

②① つくぐと臥したるにも、やるかたなき心地す
れば、例の、なぐさめには、西の対にぞ、わたり
給ふ。しどけなく、うちふくだみ給へる鬢茎、
あざれたる桂姿にて、笛を懐しう吹きすさび
つ、のぞき給へれば、女君、ありつる花の、
露にぬれたる心地して、そひふし給へるさま、
美しう、らうたげなり、愛敬こぼる、やうにて。
おはしながら、疾くも、わたり給はぬ、なまう
らめしかりければ、例ならず、そむき給へるな
るべし。はしのかたに、つい居て、「こちや」と、
のたまへど、おどろかず、「いりぬる磯の」と、
口ずさびて、口おほひし給へるさま、いみじう
ざれて、美し。(紅葉賀 P 274)

②② 大殿油まゐりて、絵どもなど御覧するに、「い
で給ふべし」と、ありつれば、人々、声づくり
聞えて、「雨降り侍りぬべし」などいふに、ひ
め君(わかきみー河内本)、例の、心細くて屈
し給へり。(紅葉賀 P 275)

②③ やがて、御膝によりかゝりて、寝入り給ひぬれ

ば、いと心苦しうて、「今宵は、出でずなりぬ」
と、のたまへば、みな立ちて、御膳など、こな
たに参らせたり。ひめ君起したてまつり給ひて
「出でずなりぬ」

と、聞え給へば、なぐさみて起き給へり。(紅
葉賀 P 276)

②④ 「ひめ君、いかにつれづれならむ。日ごろにて
なれば、屈してやあらむ」とらうたく、おほし
やる。(花宴 P 296)

②⑤ 「おほい殿には、久しうなりにける」と、おほ
せど、わか君も、心苦しければ、「こしらへん」
と思して、二條院へおはしぬ。みるまゝに、い
と美しげに生ひなりて、愛敬づき、らうくし
き心ばへ、いと殊なり。(花宴 P 297)

②⑥ 今日、二條の院に離れおはして、祭見に出で
給ふ。西の対に渡り給ひて、惟光に車のこと仰
せたり。「女房、出で立つや」と、のたまひて、
ひめ君の、いと美しげにつくろひ立てておはす
るを、うち笑みて見たてまつり給ふ。(葵 P 312)

--- (この間、「二條の君」1例 「対の姫君」
2例 「姫君」2例)

②⑦ いかがありけむ、人の、けぢめ見たてまつり分

くべき御仲にもあらぬに、をとこ君は、とく起き給ひて、女君は、更に起き給はぬ朝あり。

(葵 P 346)

まず、花宴巻までは、「若君」とともに、「姫君」呼称が用いられ、例⑮、⑯のように「姫君」と「若君」との異文もみられる。「若君」は、一般的に「貴人の幼い子女に対する敬称。男君・女君いずれにもい^{注15}う」呼称であり、紫上は、光源氏の庇護下にある幼い姫君として意識されていることがうかがえる。例⑳では「女君」呼称が用いられているが、これは光源氏が紫上に対して、一時的に、幼い姫君という意識を超えて一人の女性として意識したからだろう。

例㉔の場面を最後に「若君」呼称がみられなくなつた後、「姫君」呼称が続き、そして例㉕のように「女君」が、光源氏を指す「男君」とともに現れ、二人が新枕を交わしたことが知られる。光源氏と紫上は、今まで二條院で一緒に暮らしてきたが、二人には男女の関係はなかった。しかし、とうとう二人のプラトニックな関係が破られると、一對の男女として描かれるようになる。その後、

㉗このひめ君を、今まで、世の人も、その人とも、知り聞こえぬを、「物げなきやうなり。父宮に

知らせ聞えてん」と、思ほしなりて、御装着の事、人に、あまねくはのたまはねど、なべてならぬさまに、思し設くる御用意など、いと、ありがたけれど…… (葵 P 350)

㉘女君は、こよなう、うとみ聞え給ひて、「年頃、よろづに頼み聞え、まつはし聞えけるこそ、あさましき心なりけれ」と、くやしうのみ思して、さやかに、見あはせたてまつり給はず。きこえ戯れ給ふも、いと苦しう、わりなき物に、思しむすばはれて、ありしにもあらず、なり給へる御有様を、をかしうも、いとほしうも思されて、

「年ごろ、思ひ聞えし本意なく、馴れは勝らぬ御気色の、心憂きこと」

と、うらみ聞え給ふ程に、年もかへりぬ。(葵 P 351)

㉙西の対の姫君の御さいはひを、世の人も、愛で聞ゆ。少納言なども、人知れず、「故尼上の御祈りのしるし」と見たてまつる。(賢木 P 370)

㉚かんざし、頭つき、御髪のかゝりたるさま、限りなき匂はしさなど、たゞ、かの対の姫君に違ふ所なし。年頃、すこし思し忘れ給へりつるを、

「あさましきまで、おぼえ給へるかな」と、見給ふまゝに、すこし、物思ひの、はるけどころある心地し給ふ。けだかう、恥づかしげなるさまなども、更に、こと人とも、思ひわきがたきを、猶、限りなく、昔より、思ひしめ聞えてし心の思ひなしにや、「様殊に、いみじうねびまさり給ひにけるかな」と、たぐひなくおぼえ給ふに、心惑ひして、やをら、御帳の内にかゝづらひ入りて、御衣のつまを、ひき鳴らし給ふ。

(賢木 P 375)

③①「いづくを、おもてにてか、又も見えたてまつらん、『いとほし』と、おぼし知るばかり」と、おぼして、御文も聞え給はず。打ち絶えて、内裏・春宮にも参り給はず、こもりおはして、起き臥し、「いみじかりける、人の御心かな」と、人わろく、恋しう悲しきに、心・魂も、失せにけるにや、悩ましうさへ思さる。物心ほそく、「なぞや。世に経れば、憂さこそまされ」と、おぼし立つには、この女君のいとらうたげにて、あはれに、うち頼み聞え給へるを、ふり捨てん事、いとかたし。(賢木 P 378)

③②律師の、いと尊き声にて、「念佛衆生攝取不捨」

と、うち延べて、行ひ給へるが、いと、羨ましければ、「なぞや」と、おぼしなるに、まづ、姫君(女きみー河内本)の、心にかゝりて、思ひ出でられ給ふぞ、いと、悪き心なるや。(賢木 P 381)

③③「ゆき離れぬべしや」と、こころみ侍る道なれど、つれづれも慰めがたう、心細さ、まさりてなむ。聞きさしたる事ありて、休らひ侍る程を、いかに」など、陸奥紙に、うちとけ書き給へるさへぞ、めでたき。

浅茅生の露のやどりに君をおきて四方の嵐ぞしづ心なき

など、こまやかなるに、女きみも、うち泣き給ひぬ。(賢木 P 381)

③④女君(ひめきみー河内本・別本)は、日頃の程に、ねびまさり給へる心地して、いといたう、しづまり給ひて、「世の中、いかゞあらむ」と、思へる気色の、心ぐるしう、あはれに思え給へば、あいなき心の、さまぐ乱る、や、しるからむ、「色かはる」とありしも、らうたう思えて、常よりことに、語らひ聞え給ふ。(賢木 P 384)

例②⑦では、紫上の装着の準備をしている様子が描かれ

ており、この裳着が済めば、紫上は、成人した一人前の女性として認められる。そこで、光源氏の妻として据えられることが期待されるが、しかし、「女君」呼称とともに、その後も「姫君」呼称が続いており、期待に反することになる。長谷川氏は「紫上^{（注15）}の場合は、結婚してもまだ幼さを残していて、それが源氏との男と女の関係において、特に強調される場合」に、「姫君」と呼称されるとしている。しかし、こうして新枕後の呼称をみても「姫君」が、紫上の幼さが男女関係で特に強調される場合に用いられているとは思われない。例③などは、源氏の見た藤壺の姿が、紫上の姿と重なる場面である。ただ単に、藤壺が紫上に似ているというのではなく「違ふ所なし」と言っている。このような場面で用いられている「姫君」を、幼さを強調するものとはいえないだろう。

紫上が結婚後も「姫君」と呼称されるのは、この時点では、まだ、光源氏の庇護下にある姫君としての意識があるからであろう。さらに、賢木巻では源氏の氣持ちが、再び藤壺のもとへ強く引きつけられてしまうため、紫上を「女君」として完全に据えることができず、「女君」と共に「姫君」呼称が用いられたのだと私は考える。また、例⑮の、雲井雁の「姫君」呼称に

対する夕霧の反論から、紫上を結婚後も愛らしさを失わない女性として描くためにも「姫君」呼称が必要だったのだろう。

三、「姫君」からの脱皮

結婚後も「姫君」と呼称される女性として、葵上は、死後十年以上たつても「姫君」と呼称され、女三の宮は、出家した後「入道」と呼ばれるようになって「姫宮」と呼称される。結局、彼女たちは、光源氏を中心とした物語世界において、姫君又は姫宮という立場から脱皮することのない女性であるといえよう。その一方で、ある時点から全く「姫君」と呼称されなくなるのが、末摘花や紫上である。

末摘花の場合は、蓬生巻を最後に、全く「姫君」呼称がみられなくなる。末摘花は、常陸宮邸という、自分が唯一お姫様でいられる場所を離れるわけである。そうになると、もう姫君という立場にはいられなくなり、「姫君」呼称を失うことになったのだと私は考える。

それでは、紫上の場合はどうであろうか。紫上に「姫君」呼称がみられるのは、

この須磨巻の例が最後で、その後、

③⑤二條の院のひめ君は、程経るまゝに、おぼし慰む折なし。東の対に侍ひし人びとも、みな、わたりまゐりしはじめは、「などか、さしもあらむ」と思ひしかど、見たてまつり馴る、まゝに、なつかしうをかしき御有様にて、まめやかなる御心ばへも、思ひやり深く、あはれなれば、まかぢるもなし。(須磨 P 47)

③⑥すこし御心静まりては、京の御文ども、きこえ給ふ。…中略…二條院の、あはれなりし程の御返しは、かきもやり給はず、うち置き、おし拭ひつゝ、きこえ給ふ御けしき、猶、殊なり。

(明石 P 71)

③⑦明石の入道、行ひ勤めたるさま、いみじう思ひすましたるを、たゞ、この女ひとりをもてわづらひたる気色、いとかたはらいたきまで、時々、もらし憂へきこゆ。御心地にも、「をかし」と、聞きおき給ひし人なれば、かくおぼえなく、めぐりおはしたるも、「さるべき、ちぎりにあるにや」と、おぼしながら、なほ、「かう、身を沈めたるほどは、行ひよりほかの事は、思はじ。都の人も、『たゞなるよりは、いひしに

違ふ』と、おぼさんも、心恥づかしう」おぼさるれば、けしきだち給ふ事なし。(明石 P 72)

③⑧御文、いと忍びてぞ、今日はある。あいなき、御心の鬼なりや。…中略…「二條の君(二條の院の君―河内本)の、風のつてにも、漏り聞き給はむ事は、戯れにても、『心のへだてありける』と、思ひうとまれたてまつらんは、心苦しう、恥づかしう」おぼさるゝも、あながちなる御心ざしの程なりかし。(明石 P 88)

③⑨「あはれ」とは、月日にそへて、思し増せど、やむごとなき方の、おぼつかなくて年月を過ぐし給ふが、たゞならず、うち思ひおこせ給ふらんが、いと心苦しければ、一人臥しがちに、過ぐし給ふ。絵をさまざま書き集めて、思ふ事どもをかきつけ、返し、聞くべきさまにしなし給へり。見む人の心にしみぬべき、物のさまなり。いかでか、空に通ふ御心ならむ、二條の君(二條の院の君―河内本)も、物あはれに、慰む方なくおぼえ給ふ折、おなじやうに、絵を書き集め給ひつゝ、やがて、わが御有様、日記のやうに書き給へり。(明石 P 90)

④⑩二條院におはしまし着きて、都の人も、御供の

人も、夢の心地して行きあひ、喜び泣きも、ゆしきまで、立ち騒ぎたり。女君も、かひなき物におぼし捨てつる命、嬉しう思さるらむかし。いとうつくしげに、ねびと、のほりて、御物思ひの程に、所せかりし御髪の、少しへがれたるしも、いみじうめでたきを、「いまは、かくて見るべきぞかし」と、御心おちゐるにつけては、又、かの、あかず別れし人の、おもへりしさま、心苦しう思しやらる。(明石 P 99)

④1 女君には、言にあらはして、をさく聞え給はぬを、「聞き合はせ給ふ事もこそ」と、おぼして、「さこそあなれ。あやしう、ねぢけたるわざなりや。」「さも、おはせん」と思ふあたりには、心もとなくて、思ひのほかに、口惜しくなん。女にてあなれば、いとこそ物しけれ。たづね知らでもありぬべき事なれど、さは、え思ひ捨てまじきわざなりけり。呼びにやりて、見せたてまつらん。にくみ給ふなよ」

と、きこえ給へば…(濡標 P 113)

④2 うち返し、見給ひつ、「あはれ」とながやかにひとりごち給ふを、女君、後目に、みおこせて、「浦より遠に漕ぐ舟の」と、しのびやかに、

ひとりごちながめ給ふを、

「まことは、かくまでとりなし給ふよ。こは、ただ、かばかりの「あはれ」ぞや。ところのさまなど、うち思ひやる時く、来し方の事忘れ難きひとり言を、ようこそ、すぐい給はね」など、うらみ聞え給ひて、上包みばかりを、みせたてまつらせ給ふ。手などの、いと故づきて、やむごとなき人、苦しげなるを、「か、ればなめり」と、おぼす。(濡標 P 118)

④3 女君(うへー河内本)にも、
「しかなん思ふ。かたらひ聞えて、過ぐい給はむに、いとよき程なるあはひならん」

と、きこえ知らせ給へば、うれしきことに思して、御わたりのことを急ぎ給ふ。(濡標 P 136)

④4 藻塩たれつ、わび給ひし頃ほひ、都にも、さまぐ思し嘆く人おほかりしを、さても、わが御身のより所あるは、一かたの思ひこそ、苦しげなりしか、二條の上なども、のどやかにて、旅の御すみかをも、おぼつかかなからず、きこえ通ひ給ひつ、位を去り給へる仮の御よそひをも、竹のこの世の憂き節をも、時々につけて、あつかひ聞え給ふに、慰め給ふこともありけむ。

(蓬生 P 141)

④卯月ばかりに、花散里を、思ひ出で聞え給ひて、忍びて、対のうへに御暇きこえて、出で給ふ。

(蓬生 P 154)

明石巻から、「姫君」呼称がみられなくなる。平松氏^(注17)は「明石の巻において初めて『姫君』から脱皮した必然を明石上に求めることはできないだろうか。この強力なライバルに実質的正妻である紫上が対抗する必要がある」と見るのである。源氏との一対一の関係が破られた時、即ち明石上の登場により、紫上が男と女達の世界に投げ出された時、源氏の完全なる保護下から巢立つことを強いられたのである。」というように考察している。明石巻から、「姫君」呼称がみられなくなったのは、やはり、この巻で登場する明石君に対する意識がはたらいっているためであることは確かだろう。

紫上は、光源氏に引きとられて以来、その庇護のもとで、源氏の愛情を受け、幸福な生活を送ってきた。ところが、源氏が謀叛の疑いをかけられ、政界に身の置き所を失い、都を離れて須磨へ退去することになる。紫上は、二條院に残されて、源氏と離ればなれに暮らすことになってしまふのである。離別後、紫上は、文

を贈答することによって源氏と心を通わせ合って、愛情を確認するのだが、そこへ明石君が登場する。明石君は、身分は低い、都の女性に対抗しうる魅力で光源氏の目に留まり、その後、源氏との間の子供を産むことになる女性である。紫上に子供はないし、愛らしい性格だけを武器に対抗するわけにはいかなくなる。そこで、紫上の「内面的に成長した者としての据え直し」が行われ、「姫君」から脱皮することになる。こうした苦難に耐えつつ、紫上は、二條院で源氏の留守をまもり、女房達からも信頼される女性となっていく。源氏の帰京後、例④のように、美しく成長し、大人になった様子が描かれているが、今や、紫上は、光源氏の妻と呼ばれるに文句なしの女性であることが認められる。さらに、主人のいない二條院を守り、後に残った女房達を取りしきる役目をきちんと果たしたことにより、二條院の女主人としてもきちんと位置づけられる。これは例④から⑤にみられる「女君」呼称、「上」呼称によって明確に示されている。

紫上の「姫君」からの脱皮は、光源氏の須磨退去という不幸なできごとをきっかけに、図らずも成し遂げられ、それによって、紫上は一人前の女性に成長し、そして、「実質的正妻」としての地位を獲得したことが、

呼称からうかがえるのである。

結び

「姫君」という呼称をとりあげて論じてきたが、呼称というのは、一見何気なく用いられているようで、実は、それぞれの女性の置かれる状況、主人公や周囲の人々からの意識、その女性自身の姿や心ばえなどを反映するものなのである。光源氏の庇護下に置かれて「姫君」となり、やがて入内していく明石姫君、常陸宮邸で父の思い出と共に「姫君」として暮らす末摘花、光源氏の正妻でありながら、「姫君」から脱皮できなかった葵上や女三の宮、等々。そして、紫上は、光源氏の並々ならぬ愛情によって「姫君」となり、結婚し、須磨巻での離別の苦難を乗り越えて、「姫君」から、光源氏にとって一番大切な「女君」へと成長し、さらには、二條院の「うへ」になる。呼称によって、紫上の歩む人生は明確にされていく。もちろん、紫上ばかりでなく、源氏物語に登場する女性一人一人の人生を、呼称は映し出しているのである。

注(1) 田中恭子「源氏物語の人物造型における呼称の意義」

〔関根慶子教授退官記念 寝覚物語対校 平安文学論集〕

風間書房 昭和50年)

(2) 長谷川茂樹「源氏物語の人物呼称―『姫君』について

―」〔日本文学論集〕第3号 昭和54年)

長谷川茂樹「源氏物語の人物呼称をめぐって―『女君』を中心に―」〔日本文学研究〕第23号 昭和59年)

(3) 平松美津子「紫上の存在と価値―呼称を中心として―」

〔国文学報〕第16号 昭和48年)

(4) 宮川葉子「源氏物語姫君考」〔緑岡詞林〕第7号 昭和58年)

(5) (注2) 後者の論文

(6) (注3) に同じ

(7) (注5) に同じ

(8) (注1) に同じ

(9) 『日本古典文学全集 源氏物語(4)』(小学館)の頭注より

(10) (注1) に同じ

(11) 『岩波古語辞典』より

(12) (注4) に同じ

(13) (注5) に同じ

(14) (注4) に同じ

(15) (注11) に同じ

(16) (注5) に同じ

(17) (注3) に同じ